

3 川と生活

(1) 流域の特産

① 烏山和紙、程村紙

流域を代表する伝統産業として烏山（那須烏山市）、馬頭（那珂川町）の和紙製造があげられる。和紙の原料は那須楮こうぞで、鷲ノ子山地周辺の楮が原料に用いられ、山方地域（常陸大宮市）の「西ノ内和紙」とともにその強靱さと優雅さなどから知られるようになった。那須烏山市下境地区の地名に由来する「程村紙」は烏山和紙を代表する厚手の和紙で、卒業証書や押絵などに利用され、また「山あげ祭り」の山の材料として使用されている。現在も和紙製造の伝統は残され、「程村紙」は国指定の無形文化財になっている。

② 栗野春慶塗

栗野春慶塗（城里町）は、飛騨春慶（岐阜県）、能代春慶（秋田県）とともに日本三大春慶塗の一つで、伝統漆工芸品（漆器）の産地として知られてきた。その歴史は春慶塗の中でも最古で、室町時代中期延徳年間（1489～1492）に佐竹氏に仕えた稲川山城守義明が今の城里町（旧桂村）栗野で始めたことから栗野春慶塗と呼ばれている。別名「水戸春慶」と呼ばれ、徳川光圀公も御用塗り物師を召し抱えて奨励した。昭和 51 年（1976）、栗野春慶塗は国の無形文化財に選ばれ、現在もその伝統は受け継がれている。なお、能代春慶塗は一説によると、佐竹氏の秋田国替えの折りに同行した稲川義次が能代で始めたものといわれる（『桂村郷土誌』）。

③ 馬頭たばこ・水府たばこ

那珂川沿川は古くは煙草たばこの産地として知られた。上流の栽培地域は江戸時代水戸藩の奨励で水戸藩領大山田、馬頭を中心として那須郡に多く栽培されており、黒羽、馬頭が集散地となり、職人や商人も多かったという。下流では常陸太田、水戸周辺で盛んに栽培されており、藩の奨励で水府煙草として全国的に知られた特産品となっていった。

明治以降も那珂川流域の煙草生産を背景に水戸市を中心に煙草製造業が発達し、明治 37 年（1904）水戸煙草製造所の設置、同 38 年には水戸地方専売局湊分工場が設立され、那珂川沿川でたばこ栽培が盛んになる。大正 2 年（1913）水戸専売支局が設けられ、翌 3 年水戸専売局工場が設立された。水戸市には地方原料本部が残ったが、これも平成 18 年（2006）には廃止されることとなった。

④ 水戸納豆

水戸の城下町周辺的那珂川低地は、秋の台風期には出水でたびたび氾濫した。そこで出水の前に収穫できる早生品種わせの大豆が自然堤防上で栽培されるようになった。那珂川左岸の柳川村（現水戸市）の明治期の物産は「米、大豆、菜種」などが主に作られており、同様の作物が那珂川沿いで栽培されていた。明治 15 年県の勸業課が主となって種苗交換で導入が図られたのが山形産小粒大豆で、「土地がやせたら豆植える」という言葉があるように大豆は作付体系からも重要となった。この小粒大豆と稲わらを使った納豆が作られるようになり、大正末期水戸駅ホームで売ることから水戸納豆は有名になった。

(2) 漁法

① アユとサケ漁、青柳の鮭留

那珂川の代表的な魚としてアユとサケがある。アユは友釣り、毛ばり、投網などで漁獲されるが、オトリアユをあやつる友釣りは那珂川の風物詩となっている。

那珂川は、サケが大量遡上する南限に近く、古くからサケ漁で知られ、留め網という漁法があった。サケは烏山・黒羽辺りまで遡上したが、江戸時代は水戸城下渡村（水戸市）から湊あたりまでがサケの漁獲が多い地域であった。那珂川では引網や流網が用いられていたが、水戸市青柳では鮭留とよばれる漁が行われていた。その漁法は対岸の根本との間に川全体を横断して多数の丸竹を隙間なく立て並べ、各所に松杭を打ち、棟木を渡して丸竹を安定させ簀すのこのようにして、下流より遡上する鮭を留めて網でとる漁法である。この漁法は青柳（水戸市）の旧家菊池喜兵衛が、初代藩主頼房治世のとき（1609～1661）始めたといわれる。寛文5年（1628）、初代藩主徳川頼房が朝廷や幕府に初サケを献上して以来、毎年その年の一番サケを水戸藩から献上された。この水戸藩の「献上鮭」は初霜漬こじづけといって糶漬にしたものといわれる。献上鮭の加工も菊池家が行ったといわれる。この鮭留漁は一時中断したが昭和に入っても続いていた（『水戸市史』）。

那珂川では明治9年（1876）全国で初めて人工孵化が行われた（『常磐路の歴史散歩』）。今も栃木・茨城両県においてサケの孵化放流事業が行われている。



(平成17年7月)

図2-20 アユ釣りの様子（那須烏山市）

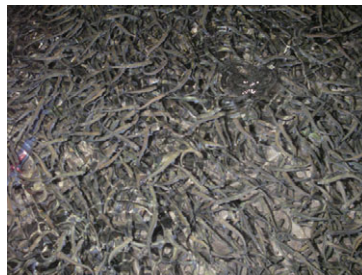


(写真：『写真記録 茨城20世紀』)

図2-21 那珂川の鮭留漁（昭和32年）



(写真：茨城県農林水産部)
ふ化直後のサケ稚魚
(受精後約30日)



(写真：茨城県農林水産部)
放流直前のサケ稚魚
(受精後約100日)

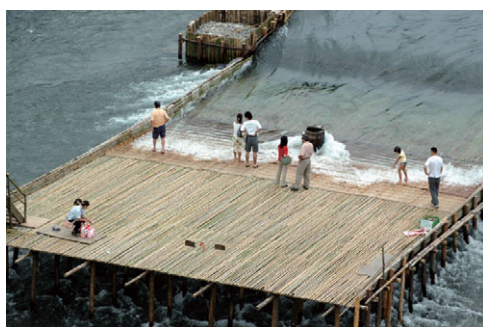


(写真：茨城県農林水産部)
飼育池で成長した稚魚は、水路を通して那珂川の支川へ放流する

図2-22 那珂川のサケ孵化放流事業

② 築漁

那珂川では、中流部を中心として築漁が盛んである。築漁は中国を発祥の地とし、日本には弥生時代に伝えられたと言われている。那珂川では支川の荒川に築かれたのが最初である（『久慈川・那珂川見聞録 Vol.14』）。那珂川の築漁は主にアユを対象としており、その他にウナギやナマズ、コイなども築にあがる。今に残る那珂川の築の中でも「大瀬築」は100年以上の歴史をもち、百年築と呼ばれている。現在の築は全て観光用として、栃木県側に、黒磯観光築（那須塩原市）、黒羽観光築（大田原市）、寒井観光余一築（大田原市）、落石観光築（那須烏山市）、矢沢の築（那須烏山市）、舟戸観光築（那須烏山市）、高瀬観光築（那珂川町）、大瀬観光築（茂木町）の8箇所が設けられている。その他那珂川の支川武茂川に2箇所、荒川に3箇所、箒川に2箇所ある。築の設置期間は7月～10月で、築の伝統的な技法は築師と呼ばれる職人の経験と勘によりつくられるが、それぞれの築は造り方も異なるという。



(平成17年7月)



(平成17年7月)

茂木町の大瀬観光築は那珂川最下流の築である。

図 2-23 大瀬観光築

表 2-2 那珂川流域の築（観光築）

	名称	場所	設置期間(例年)	施設収容(人)
那珂川	黒磯観光築	那須塩原市黒磯 那珂川河畔公園隣	8/1 ~ 10/31	250
	黒羽観光築	大田原市黒羽向町 黒羽橋下流	7/20頃 ~ 10/31	600
	寒井観光余一築	大田原市寒井	8/1 ~ 10/31	180
	落石観光築	那須烏山市宮原 境橋下流	7/25 ~ 10/31	1,000
	矢沢の築	那須烏山市滝田 興野大橋下流	7/下頃 ~ 10/31	400
	舟戸観光築	那須烏山市野上 下野大橋上流	7/中頃 ~ 10/31	300
	高瀬観光築	那珂川町谷田	7/20頃 ~ 10/31	800
	大瀬観光築	茂木町大瀬	7/15頃 ~ 10/31	500
武茂川	馬頭観光築	那珂川町久那瀬	8/1 ~ 10/31	100
	ゆりがねの築	那珂川町健武	8/1 ~ 10/31	50
荒川	一ツ石観光築	那須烏山市向田 向田橋下流	7/20頃 ~ 10/31	200
	大金観光築	那須烏山市岩子地内 新荒川橋上流	8/1 ~ 10/31	150
	森田観光築	那須烏山市森田地内 荒川橋下流	8/初 ~ 10/31	150
箒川	佐久山観光築	大田原市佐久山 岩井橋上流	7/下 ~ 10/31	50
	松原築	大田原市佐久山 岩井橋下流	8/1 ~ 10/31	50